風の中（その一）

○　灯をかかげ枯野をゆくや風の中　（久）

　詞書には「還暦處感」とある。作者は無名の詩人、無名の俳人であるので、その略歴を紹介しておこう。大正元年東京麹町で生まれる。平成元年七十七歳で永眠。（１９１２－１９８９）　昭和七年、第二次文学同人誌「新詩潮」（編集部同人：木下卓爾、中村妙子、小杉謙夫、鎌田慶三、垂井巧、曽根崎久）を発刊するも、直ちに発売禁止処分を受ける。　昭和十八年、召集を受ける。野比海軍病院に配属、その後浜名海兵団の衛生兵となる。　戦後は新宿区役所で「食品衛生監視員」として勤務するかたわら文学活動を続ける。　昭和二十六年、「純正詩学塾」を興し『詩学』執筆に取り組む。主に詩、俳句を創りながら、塾生の指導にあたる。「風の中」では彼の句の鑑賞を通じて、彼の提唱した『詩学』の内容を、できる限り伝えていきたい。

　＜灯をかかげ＞の「灯」は「私の提唱する日本の精神風土に基づく文学」を意味する。「灯」が文学の灯であるから、彼の場合「枯野」は詩壇であり俳壇を暗示する。＜風の中＞の「風」は凩を指すのであるが、風には時に強い風もあれば弱い風もあり、順風もあれば逆風も吹くのであるから、本質は凩であるが、＜風の中＞とおとなしく表現したのであろう。

　ここに、冨澤赤黄男に触れた「雲を咬む（２）」での文章を修正して再掲しておこう。

　○　石の上に秋の鬼ゐて火を焚けり　（冨澤赤黄男）

　久の句の舞台は「枯野」であり、赤黄男句の舞台は「石の上」で、ともに寒々として荒涼たる風景が浮かぶ。久はその舞台の中で、「理想の灯をかかげ（豪然と）風の中を行く」のであり、赤黄男は「秋の鬼と成って火を焚き、今は亡き戦友に向かいて（鎮魂の思い噛みしめている）」いるのである。いずれの句にも、この世に絶望しながら絶望しきれない魂の叫びがあるように思えてならない。

風の中（その二）

○　田を流し雨おさまって天の川　（久）

　実風景は明瞭で特に説明する必要もないだろう。連想するのは芭蕉の、

　○　五月雨をあつめて早し最上川　（芭蕉）

である。初案は“あつめて涼し”であり、高野一栄亭における歌仙の発句であった。挨拶の句である。　久の句には「自然に翻弄される農民の諦観」が垣間見えるが、芭蕉の句はおおらかに自然の営みを“心の風景”として捉えた旅人の視点である。

風の中（その三）

○　地に還る露一刻の美しく　（久）
　この句の改案が、
　○　月宿す露一刻の美しく　（久）
である。
　私のおぼろげな記憶では、昭和十二年に百三十日の短い生涯を閉じた久の子、詩子を偲んで詠った句と理解している。死因は「小児性突起炎と消化不良」と記されている。当時、久は今で言うフリーターで定職に就かず、文学活動を展開していた。仲間の一人に木下夕爾がいる。しかし仲間の多くは召集令状を受け戦場に送られていった。言論弾圧下の“冬の時代”の句であろう。

風の中（その四）

○　凍て雲を頭上にゆくや枯野徑　（久）

　詞書には「召集を受く」とあるから、昭和十八年十二月、三十一歳の作である。昭和十八年といえば、南方諸島での陥落のニュース、そして次の年（昭和十九年）には神風特攻隊が出撃するようになる。まさに敗色濃厚、戦後すら予測できずに空襲に惑う人々の心情はどのようなものであったのだろうか。季語と紛らわしい＜雲が凍る＞で重くのしかかる戦時体制を暗示し、言論弾圧の矛先をかわそうとしたのであろうか。枯野徑を歩きながら閉塞状況を＜雲が凍る＞と表現した久の心の風景には、詩人の切ない哀しみがある。

風の中（その五）

○　波足を残し渚は雪明り　（久）

　詞書には「野比新兵時代」とあるから、昭和十九年の冬（翌年夏終戦）、三十二歳の作である。兵舎は海岸近くにあったのだろう。敗戦濃厚、希望のない新兵時代に、このような句を遺した作者は、やがて戦後、『詩学』を書き始めるのである。それは日本人による日本語の『詩』を目指すことでもあった。
　久と鶴彬の類似性と相違点について、
○　法難のたびに意識が鍛へられ
　鶴彬の昭和四年三月一日発行の「川柳人」（一九七号）に発表された句の中の一句。この年の六月一日発行の「川柳人」（二〇〇号）に「芸術における美の階級性と宣伝性・・・プロレタリア川柳入門のイロハに就いて・・・」という評論を公表する。＞
　久は昭和六年、共産党組織を脱退する。久は「はの２００支局長」として「戦旗」（非合

法出版）に携わっていたが、組織の冷酷さに反発し脱退する。共産党の眼から逃れるため、住所をたびたび変えた。鶴彬はあくまで“プロレタリア川柳”を貫いたが、久は“階級を越えて”の『文学』に方向を変えた。しかし無産者階級として生きる“人間として”の『文学』は戦後の文学活動を支えた。

風の中（その六）

○　凩の野徑駈け抜けゆき悩む　（久）

「倉鼠抄」にある作品、恐らく戦後の作であろう。

木枯とくると、どうしても次の三句を比較したくなる。

○　木枯のはてはありけり海の音　（言水）
○　海に出て木枯帰るところなし　（誓子）
○　凩の野徑駈け抜けゆき悩む　（久）

言水の句には省略はあるが、一読して誰にでも推定できる省略であり、きわめて散文に近い。この句は蕉風以前の談林俳諧である。“木枯のはてはありけり”と“海の音”との結び付きは、実感によってたちどころにわかる。限りなく散文に近いが、季感がある。

誓子の句は“海に出て”と“木枯帰るところなし”との結び付きをどう解釈するかによって意見がわかれるだろう。単純に時間の流れとして捉えれば無理なくわかるが、その場合、この句は散文となる。しかしながら、“海に出て”と“木枯帰るところなし”の結び付きに意味を見出す読者もいる。その読者にとっては、この句は詩文なのである。

久の句は、“凩の野徑駈け抜け”と“ゆき悩む”の結び付きをどう受け止めるかによって、散文にもなれば、詩文にもなる。だが、“野徑駈け抜け“に注意したい。決して“路地を駈け抜け“とすれば、写実であり、容易にわかる風景である。“凩の野徑駈け抜けゆき悩む”は詩文であり、“凩の路地を駈け抜けゆき悩む”は散文である、と断言したが、この違いを説明するのに一般には“詩趣”があるかないか、で説明されるであろう。ところで“詩趣”とは何か、となるともう説明できない。多くの俳論の問題点は、“詩趣”のような意味不明の用語でもって、句の良し悪しを判定することにある。従って“詩趣”を判定基準にすることは諦めよう。実は“路地”の方は理性の論理で説明できるが、“野徑”の方は理性の論理では説明できないのである。木枯しが“路地”という狭い空間を駆け抜ける、後ろから風が吹いてきたと思ったら、いつの間にやら前から吹きつけて来る、そんな経験はないだろうか。そこで“ゆき悩む”も、成る程と理解できるのである。きわめて日常的な実感である。しかし“野徑”となると、戦後の混乱期を暗示させる。まさに価値紊乱の時代を髣髴とさせる。俳句は本来『詩文』なので

あるから、殆んどの俳句は詩文の要素を有っている。
“木枯”三句を例示したのは、散文と詩文には明確な境界線がなく、限りなく散文に近い詩文もあり、また、限りなく詩文に近い散文も存在することを、暗に示したかったからである。

風の中（その七）

○　ほろ酔の謡い又よき朧かな　（久）

「倉鼠抄」にある句、恐らく戦後まもなくの作であろう。そのころ久は定職がなく、露天商などをして生計を立てていた。戦後、銀座界隈には駐留軍の兵士が酔って、“ニホンノオジョウサン、コンニチワ・・・”と歌って歩いていたとの話を聞いたことがある。日本人の酔客も浪花節など歌っていたのではないだろうか。戦後の混乱期は、憲兵の監視もなく、貧しいながらも人々は自由を肌で感じていたのではないだろうか。焼跡の桜散る頃とは、まして朧月の下であるとすれば、想像するだけでも、なぜかわくわくする思いがする。

風の中（その八）

○　さからへぬ蝶なり風と西へ行く　（久）

「美土里風抄」にある句。恐らく、新宿区役所淀橋支所に「食品衛生監視員」として勤務していた頃（昭和２５年以降）の作品ではないだろうか（推定）。戦後の混乱期が過ぎ、世情は落ち着きを取り戻し、もはや久も肩肘を張って、時流に逆らうよりも時流に身を任せて、それなりに生きようとしていたように思える。この頃、久は文学雑誌「星雲」（昭和２６年）を発行し、純正詩学塾を立ち上げ文学活動を軌道にのせた。春の香りを伴った東風に身を任せ、西の彼方に我が文学の行末を夢みていたのではなかろうか。

風の中（その九）

○　蔓ばらや花に魅されし指の傷　（久）

「詩塵庵句帳」にある句。昭和３０年代の作、久４０代後半（推定）。ありふれた表現に“美しいものには棘がある”がある。この通俗性が「指の傷」によって救われたと見たい。私がこの句に接したのは２０代であり、若さ故に魅かれたのであろう、今もって記憶に留める句である。久はこの句を佳句とは認めていなかったようであるが、若さ故に受け入れた

句として紹介しておこう。

風の中（その十）

○　露冷えて或る夜気のつく星の位置　（久）

「詩塵庵句帳」にある句。「星」は北極星のことであろう。船乗りや旅人が“方位を定めるときの指針とする星”である。作者は冬の夜空の北極星に気づいて、己の行末をしかと確かめたのであろう。「露冷えて」には日常生活そして社会風潮に寒々とした感慨をこめているように思われる。今、自分はどの道を歩いているのだろう、定かでない、しかしあの星はいつも同じ位置にあって、まるで我が行末を見詰ているようでもある。身に寒さを感じた時それに気づいた、そんな意味に受け取れる。

風の中（その十一）

○　風にのり風に流され除夜の鐘　（久）

「詩塵庵句帳」にある句。自らの来し方をおもい、行末の定なきを心に、除夜の鐘を聞いているのか、それとも除夜の鐘を聞いて、我が人生を振り返っているのか。除夜の鐘に触発された心の風景としたい。恐らく五十代の作品であろう。やがて「還暦處感」と題して曽根崎久は、

○　灯をかかげ枯野をゆくや風の中　（久）

と作句することになるのである。

風の中（その十二）

○　枯野路や風に抗がふ日の多き　（久）

「詩塵庵句帳」にある句。還暦の年か、もしくはその前年あたりに作られた句のようである。

どうしても「還暦處感」の句、

○　灯をかかげ枯野をゆくや風の中　（久）

が思い出され、ともに並べて鑑賞すべき句のように思える。「灯をかかげ」て枯野を行くのは、自分自身を鼓舞するためでもあり、また、闇をさ迷う旅人を思い遣ってのことだろう。いま枯野路を歩んでいる。風を遮るものはなにもない。向かい風が吹きつける日が多い。だからと言って、身を避けるところは無い。風に逆らっても歩むよりほかにない。想えば、

わが人生は逆風の中にあった。そして、今も。そんな“心の風景”を思い浮かべる。曾根崎久は、「詩人の心象風景には、荒野か枯野しかない」と言っていた。この句はまさに「枯野」とは、かくなるものと示した句表現と言えよう。